

あなたにとって演劇とは、
そして、旭川市民劇場とは？
一年を通して、見えてき
たこと、感じたことを投稿
いただきました。



旭川でいい演劇を

観続けるために

七〇代 男性

私の今年の一押しは『きみはいくさに征ったけれど』です。竹内浩三という人間の存在を知ることができたことは私にとって何よりも得難いことでした。歴史の中でも埋もれている人をどう見つけ出すのかは難しいことですが、その努力を惜しまず継続してきた青年劇場。青少年に向けた公演を徹しい条件にありながらも続けてきたこととの積み重ねがこの作品を生み出したのではないかと思えます。「いじめと戦争」の問題を時空を超え、竹内浩三と宮斗との出会いを見事なまでに融合させました。それは竹内浩三の圧倒的な存在感、前向きで強烈な個性に出会うことで、いじめを受けている宮斗が少しずつ変わっていく様子がよく描かれています。人は人との出会いの大切さを感じさせてくれました。一方で「生きたい」という竹内

浩三の思いが痛いほどに胸にささり、なぜか悔しさを感じました。何ものにもなれたであろう若者の才能を戦争は灰にしました。戦争は人の人生を容赦なく奪っていきます。それは国家という名のもとに正当化されます。

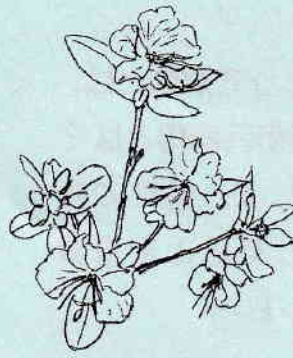
その過去のものと思われていた戦争が新たな装いを凝らして私たちの目の前に迫ってきていると感じるのは私だけでしょうか。「すべての戦争は自衛を理由に行われる」と言われています。そして「攻められたらどうする」という権力の脅し文句で、「敵基地攻撃能力の保有」を始めとする軍事力拡大のために防衛費増額の容認を国民に迫ってきています。このような脅しに対して「戦争反対」と言えるのでしょうか。一人ひとりが問われているのだと思えます。

私はこのお芝居を観て、そして観終わってから、自分自身にそのことを問いかけ続けています。そうしたとき、竹内浩三の詩を思い出します。芝居のなかで素朴な

言葉で、あきらめず、どこまでも、どこまでもしなやかに抗っている姿が私に勇気を与えてくれます。生きていく意味を、戦争の愚かさを、命の重みを教えてくれます。この世に殺されていい命など一つもないということ。殺されるために生まれてきた命などひとつもないことを。それはイジメにも通底しているのではないかと思えます。

社会が平和であることが生きるうえで譲れないことであるように、演劇公演・鑑賞運動にとっても重要な要件ではないかと思えます。テレビで戦争を見なければならぬ現実を前にして、私たちは社会に目を閉ざしてはいけなないと思えます。演劇を観続けると言うことは、市民劇場の存続に全力をあげるのと同時に、この社会の平和を守ること、守り続けることが必須ではないかと思えます。その活動は一人ひとりの自覚によるものではないかと思えます。私の『学び舎』である市民劇場をこれからも存続させ、いい演劇

を継続けるために、前提条件を守るためにこれからも鑑賞運動、そして平和運動にも関わっていききたいと思っています。



生まれがたき人界に生まれ

— 生きる！

きみはいくさに征ったけれど評

A1 魔術師 大原権子

全編に込められている人生肯定のことづて。竹内浩三の『魂』が、いじめの被害者で今にも消えていきそうな来生宮斗の前に現れた。マンシヨンの屋上で思いつめている時、何だかんだと話しかける。

あちらの世界からというよりは私たちが呼吸しているこの空気の中の宇宙の素粒子や原子の集まりが浩三の魂のオーラになって宮斗に語りかけているようだ。

銅鑼³²⁹号に、浩三は日本大学映画科で伊丹万作の知遇を得たとある。万作の監督作一九三六年公開の『赤西蠣太』をテレビで観たことがあった。浩三が青春の入り口で出会った人ならば多大な影響を受けていそうだ。

さて戦争、いくさを題材とした映画の中で、戦闘や恐怖を煽る場面が長すぎたり多すぎたりで、観たことを後悔し、夢に見てうなされるようなものがあつた。誰かが名作だと評しても二度と観ないと決めたものもある。しかし、例えば映画の神様、淀川長治氏が絶賛したというソ連のチュフライ監督作『誓いの休暇』(一九五九年)には主人公の青年の優しさが描かれている。またアメリカ映画マイルストーン監督作『西部戦線異状なし』(一九三〇年)で印象的な

が戦場で一瞬、蝶に見とれた若い兵士が撃たれる場面であつた。浩三はこの映画を観たのだろうか。詩に書かれている蝶から察するに、レコード店でおしまいまで聴きたかつたチャイコフスキー『悲愴』、そしてエリック・サティの『ジムノペディ』そして夜空のオリオンやカシオペアを見つめていた。スマホに、『三ツ星さん』と打ちこむと『美杉の小さな庭でおきていること』というブログが出た。

そこに浩三が小津安二郎に憧れ日大映画科に進学したとある。記事の主が詩を二編紹介している。『骨のうたう』と『宇治橋』である。何と豊かな感性だろう、この詩に触れたことに感謝の気持ちでいっぱいになった。銅鑼で紹介『ほくもいくさに征くのだけれど』そして青年劇場の演目『きみはいくさに征ったけれど』で、宮斗が未

来へ歩み出すのが判る。

観劇は感激

F 09 はなまめ N

役者はプロとは言え、何年ものコロナ禍で「けい古」にも「本番」でも緊張の中で舞台を創りあげ、私たちに最高の表情を見せてくれる。二〇二二年はロシアのウクライナ侵攻がリアルタイムで報道される中、戦争のテーマを取りあげられることも、更に重かつたであろう。

「陶貨を作る職人の意地」「竹内浩三と現代の高校生との出会い」など脚本家・演出者の意気込みが役者たちを通して、戦争の矛盾・むごさ・悲惨さなど演劇でなければ表現することが出来ないであろうことを、私たちに迫るメッセージが投げかけられた。

二〇二〇年の老婆から、次は古老として登場した加藤健一さんからは、いつも元気をもらおう。カーテンコールの健一さんの心温まる力強い挨拶に、「あゝ市民劇場の会員で良かった」と幸せを感じる一瞬である。B作さんと健一さん

の役が反対であったなら、どんな『サンシャイン・ボーイズ』となるのか想像を膨らませるのも又楽しい。

朗読劇も印象的な例会であった。情景が浮かび、いつしかその世界に惹きこまれた時間は心地良かった。もう一度、聴きたい、観たい。

私事ですが、三年振りにささやかにステージに立つての合唱（マスク着用）が実現できた。大勢の前に立つた喜び、その拍手は嬉しかった。劇団員の人たちは、私の何十倍も私たちの拍手で力を得るであろうと思う時、演劇を観続けるという事は、共に演劇を創りあげているということを、改めて考える。

今だからこそ、演劇も音楽も私たちの生活の一部であることをかみしめて生きていきたい。

二〇二二年度の総合点は！

C 36じゅん植田

今年も色々な作品を観たけれど、『銀色のライセンス』落語「死神」とお芝居の組み合わせで死神の現れ方がピント外れな気がし、高齢者の免許返上にはならない。

『サンシャイン・ボーイズ』佐藤B作さんの今までは違ったお芝居が観られ、また加藤健一さんと掛け合いも良かった☆☆☆

『二銭陶貨』文化会館ではセリフが聞きづらく、公会堂だったらと思いましたが、初めて知ったお金まて陶器で作るほど資源がなかった日本（今もないけれど）。

『茂山千五郎家狂言』アイルランドの劇作家が書いた『猫と月』は、わからなかった。解釈の違いでしょうか？いつも思うのは「狂言」お芝居ではないの！

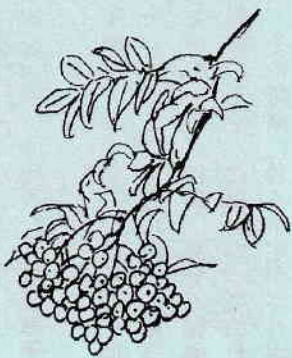
『きみはいくさに征ったけれど』初めて知った詩人竹内浩三にインパクトありすぎ、幽霊のほずがと思うと違和感があり、感想会に参

加して幽霊ではなく宮斗本人（宮斗の心）を表していると感じ、そうか？台本を読んだはずなのに☆☆☆

『松本清張朗読劇』期待もせず会場へ。ラジオの朗読の時間と違い、メリハリがきいた語り口になぜかまわりの景色が見えすこく感動した。『青春の彷徨』或る「小倉日記」伝（芥川賞受賞）は、初めて知った本なので感動も大きかったのか？朗読劇なので☆☆☆

今年も初めての出会いがあり観続けてよかった。二〇二二年お芝居の感度が少なかった気がするも、総合点は少しおまけ☆☆☆

今年も初めての出会いがあり観続けてよかった。二〇二二年お芝居の感度が少なかった気がするも、総合点は少しおまけ☆☆☆



今年印象に残った三作品について

六〇代 男性

二〇二二年度の例会作品について、三作品を強く印象に残った順に書いていきたいと思えます。

まず、最も印象に残ったのは十月例会青年劇場『きみはいくさに征ったけれど』です。いじめを受けている高校生の宮斗を主人公にして、弱者の声なき声をすくい上げ具体的に描きながら、そこに寄り添っていく作者大西弘記の真摯な姿勢に共感しました。竹内浩三の存在感が凄く、彼の前向きで強烈な個性に出会うことで、宮斗の気持ちも少しずつ前向きに変わっていく様子がよく描かれていました。また、竹内浩三が戦争により一瞬に消えてしまう最後の場面に、「あの戦争さえなければ」というメッセージが強く伝わってきました。私にとっては、この舞台が間違いなく今年一番の内容でした。

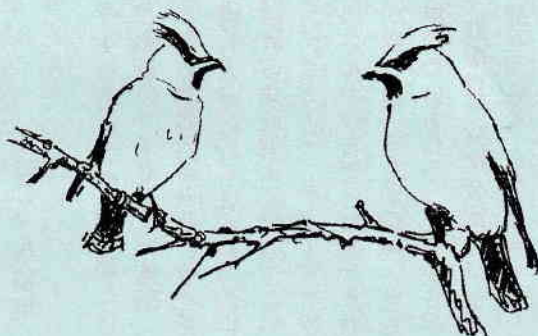
次は、四月例会加藤健一事務所

『サンシャイン・ボーイズ』です。加藤健一と佐藤B作二人の絶妙なやり取り・間合いは流石です。加藤さんが二〇一七年五月例会

『Be My Baby』の時に、事前に事務所で開催した講演会の中で「ライブ感」の話をしていましたが、今回はまさに「ライブ感」が炸裂していたように思います。互いに相手の凄さを認めながら、決して仲良くなれない二人の辛口コメディ。ただ笑うだけではない、人生の哀感を感じさせる素晴らしい舞台でした。

三つ目は、六月例会文学座『一銭陶貨』です。出がらしと周りから言われ、自らも生きる氣力を失くしていた足の不自由な昭二（奥田一平）が、一銭陶貨造りを通して、彼を支える秋代（平体まひろ）と共に、前向きに生きようと変わっていく様子に共感しました。また、戦争というものが、被害にあった人々に身体的な傷と同時に心に大きな傷を残す理不尽さが、よく描かれていました。

私の市民劇場の大先輩が、以前に「優れた芝居というのは、芝居の向こうに自分の姿が見えてくるような芝居」と言っていたことを思い出します。私も、芝居の登場人物の誰かに感情移入したり、芝居を観ながら実は自分の考え方や人生観と照らし合わせながら観ていたりします。今年は、上記三作品がまさにそのような芝居でした。



観なきや、わからん

E 38 ふるーつ・ばすけつと

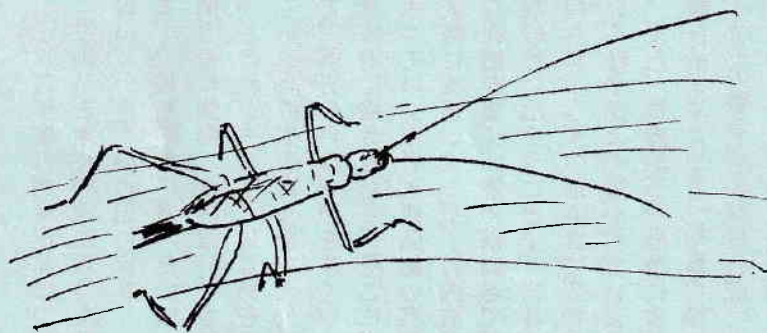
大谷淳子

観劇は、ライブ。その時の一期一会。観てる自分の状況が、相当にモノをいう。体調、気分、観劇の前後の予定。仕事をもつていれば、その時刻に着く予定がギリギリになったり、交通事情やら、果ては二幕目から入場ということもある。今の私は仕事をしていないが、それはもう、ドキドキのヒヤヒヤの、果てはガツカリ、ゲンナリ。金を返せえくつてな気持ちになる有料芝居にも出あった。

が。それとても、観てみなければわからない。出あいなのだから。旭川市民劇場は、自分で選ばないような作品や劇団に出あえる。そして、それは、自分が期待していたりする有名な役者よりも、全くもって知らない劇団の演目が、ずっと心に残っていたりする。要は、全ての作品にできる限り足を運ぶことだ。できるだけ平常心

持ちで。

二〇二二年のバラエティな六本は全て鑑賞できた。青年劇場の『きみはいくさに征ったけれど』を推す。またまた、新たな出あいを。



了